

調査報告

国際標準チューター育成プログラム ITTPC 導入による 学生チューターの育成と学習支援

津嘉山淳子

Introduction of International Tutor Training Program Certificate and its Effects on Tutors and Learning Support

Junko Tsukayama

要 旨

近年、多くの教育機関が学習あるいは教育支援センターを設置しているが、日本の学習センターにおいては、学習支援者（以下チューターと呼ぶ）のほとんどが専門教職員あるいは大学院生となっている。アメリカではすでに約40年前からピアラーニングの研究が進められ、学習支援者への育成プログラムを開発しチューターとしての技術取得証明書を基準化し発行するシステム（International Tutor Training Program Certificate）も活用されている。沖縄県名護市の名桜大学にある言語学習センターは2002年にこのプログラムを導入し、それを基盤にチューター育成プログラムを実施している。このプログラムの効果を観測するために2011年7月に言語学習センターに実際に働いているチューター7名とチュータリングを利用した学生142名にアンケートを実施した。結果としてチューターはトレーニングを受けることでコミュニケーションスキルや学習支援技術の向上を実感し、学習支援を受けた学生もチューターの支援によって学力向上に役立ったと感じていることがわかった。

キーワード：学習支援センター，チューター育成プログラム，ITTPC

Abstract

Recently, Learning Support Centers have been established in many educational institutions. The most of the learning supporters -tutors- are part time or full time experts, instructors or graduates. Peer learning has been studied in United States for 40 years and they have developed the tutor training program and applied into the actual stage. The Language Learning Center in Meio University is the one that has been introduced the tutor training program from United State in 2002. In order to observe some effect on tutors through the trainings, the surveys were performed with seven tutors and 142 students who actually experienced tutoring by tutors in 2011. The result showed that the tutors felt that their communication skills and learning support skills had been improved. Likewise, the students who experienced tutoring gave positive result that they appreciated the tutors' support and felt that their academic skills also improved.

Key words: Learning Support Center, Tutor Training Program, ITTPC

¹⁾ 名桜大学教務部教務課 言語学習センター 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1
Language Learning Center, Affair of Education, Meio University, 1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585

1. はじめに

1.1 今日の大学教育の実態

「大学全入時代」とよばれる現在、多くの大学あるいは教育機関で学生の学力低下が深刻な問題になっている。同時にこれらの問題を解決するために学力向上や社会人基礎力向上支援のための施設（センター）が研究され設置されつつある。これは大学・短大進学率が50%¹⁾を上回っており、明確な目的を持たずに大学進学をする学生が増加傾向にあることが大きな要因と考えられている。ある大学では、「大学で学ぶということに明確な目的が見つけられず、授業や大学生活で無気力になり、不登校、成績不振から退学へとつながるケースが少なからずある¹⁾」と大学生の実態を述べている。また、グローバル化によって企業が「率先力」のある人材を求めるようになり、大学に教育機能の強化を要求するようになった²⁾ことも学習支援センター設置のもうひとつの重要な要因になっていると考えられている。

1.2 日本の学習支援センターの状況と課題

2011年現在日本の高等教育機関の中では約30ほどの学習支援あるいは教育支援センター（室）と呼ばれる施設があるが、その中のほとんどが理工系が多いことが特徴である²⁾。これらの学習支援センターの特徴は、基礎学力や人間力などといったコミュニケーション力向上の支援が多い。これは前述したように基礎学力の低下を解消し、本来の高等教育の習得に繋げるためと企業が求める「率先力」を育成するためであろう。センターごとに各々の目的によって違ったプログラムが設定されており、学力中心のものもあれば社会人基礎力も合わせたプログラムが設置されていたりするが、いずれにしても学生の学習あるいは社会人基礎力向上に関連したものが多くみられる傾向にある。

学習支援者（以下チューターと呼ぶ）としては教員や非常勤講師など専門職員が多く、通常利用者の数よりかなりの比率で少ないことが多い。そのため個々の利用者としての学力向上は成功しても学内全体となると人員不足が課題となっているのが現状である³⁾⁴⁾⁵⁾。しかしながらそのような現状の中でもピアラーニングで学生サポートを実施している機関もある。日本工業大学の学修支援センターではチューターとして教員や大学院生を当てているほか、「上級生サポーター」として学生のピアラーニングを実施している⁶⁾。上級生サポーターは主にレポートあるいは履歴書作成相談を中心に行っているが、結果として「上級生も社会化し、人間形成が行われて⁶⁾」いると記録されている。その他にも「できる先輩」が後輩を支援する形が自然に形成された山梨大学の供創学習支援室の報告では、学生に自主的にグループ学習や専門の

常駐教員と議論するスペースを学習支援室として設置したところ、「上級生が下級生に実体験を基に説明を行うという学年間交流」が観測されたとしている⁷⁾。これらの例は、学生自身が他の学生を支援することは可能であり互いに成長する機会になっていることを示している。今後、学生同士の学びの場やそのような機会の提供は教室内の授業はもちろんであるが、学習支援センターにとっても重要な位置を占める可能性が大いにあると考える。

1.3 本研究の意義

今後も学習支援センターの設置はさまざまな形で増加すると考えられるが、その際チューターの人員確保とピアラーニングの活性化は解決しなければならない重要な課題である。確かに専門教員からの個別あるいはグループでの支援はより多く深く学ぶことは可能であるが、利用者の数によっては教員の負担が大きくなることは必然的である。一方、ピアラーニングの場合、先ほどの例にもあるように支援する学生も支援される学生もともに成長できる最大の利点がある。アメリカでは約40年前からすでにピアラーニング効果に着目し、学習支援センターに学生チューターを配置し、学生が学生を支援するシステムが開発され現在多くの教育機関が導入している実態がある。特に注目すべき点は学生が学生を支援する際、学習支援者である学生チューターのための育成プログラムを標準化し証明書を発行できるシステムを実施していることである。これにより学生チューターは一定の基準に達した技術を習得し、より効果的な学習支援を提供できるようになる。本研究は、日本でいち早くこのシステムを導入した機関である沖縄県名護市の名桜大学言語学習センターでの活動とその効果を検証するものである。

2. 言語学習センター（Language Learning Center—以下 LLC と呼ぶ）

2.1 名桜大学の概要

名桜大学は沖縄県名護市に位置し、「国際舞台で活躍できる創造性豊かな人材を育成する」を基本理念に掲げ1994年に私立大学として設立されたが2010年に公立大学となった。平成23年11月現在の名桜大学公式ホームページによると、1学群（国際－6専攻）1学部（人間健康－2専攻）と2つの大学研究科をもち、在学学生は約2000名である。

2.2 LLCについて

2001年当初、本学は国際人育成のために言語教育に力を注いでいたが、授業の中での個人間の学力差と学生の自主学習離れは深刻な問題となりつつあった。また、学生に自主学習を促進できるスペースを提供する必要を感

じていた。LLCはそれらの解決策として設置された。しかし学生の学力向上の支援は、チューターの学力だけではなくある程度の個人指導（以下チュータリングと呼ぶ）の技術も不可欠であると考え、アメリカのチューター育成プログラムを導入することになった。そのためLLCの目的として「言語学習者の自主学習支援」だけではなく「チューターの技術向上」の2つの目的をもって2001年に開設した。

人的体制はセンター長1名、副センター長1名、専任係員1名、学生（大学院生も含む）13名からなる。学習力支援の対象科目は主に英語であるが第2言語（中国語や韓国語など）、そして留学生に対しては第2言語としての日本語である。

LLCは常駐の専任係員1名と13人のチューターで業務にあたる。チューターは有償で勤務にあたりシフト制で稼働する。トレーニングミーティング（2時間）は週1回設けられ全員参加となっている。

開館時間は平日の8:45～17:45（トレーニングミーティング時間を除く）まで開館し、土日祝日と長期休暇中は閉館となる。利用対象者は本学在籍者であるが、学外利用者は利用カード（1年間有効）を所有することによって利用可能となる。

2.3 設備と教材

設置場所は学生が講義の合間にすぐに立ち寄れる講義棟204教室（40名許容スペース）に設置されている。設備は利用者用PCが10台とカウンター用PCが2台、カセットCDプレーヤーが3台とテレビが2台とソファがそれぞれ1台ずつ学生の読書スペース、そしてグループでのテレビ視聴用に設置されている。6人用丸テーブルが3セット配置され、館内には書棚が7台設置されている。教材は主に英語を中心とし、韓国語や中国語など第2言語関連の辞書や参考書、レベル別リーダーなど約3000冊の書籍がある。隣の教室（講義棟203）はスタッフルームとして主に常駐専任係員によって使用されるが、DVDやCDなどの本体はこの部屋に整理収納されている。

2.4 LLCの主な活動

主に発表の練習（英語）、音読（英語）の発音トレーニングや速読トレーニングなど授業課題のサポートが多いのが特徴であるが、個人で第2言語習得学習や言語系検定受験学習、テスト勉強のために来館する利用者もいる。

プロジェクトの一環として、何人かのチューターたちによる言語ワークショップ（約10回のミニクラス）開催も自主学習者のサポートに大いに役立っている。学生や地域への情報発信として、2011年6月に独自のホームページ

（<http://sites.google.com/site/meiollc/>）を更新した。また同時期にフェイスブック（facebook）やユーチューブ（Youtube）チャンネルも作成し、LLCの活動を広く宣伝してる。

2.5 学生利用状況

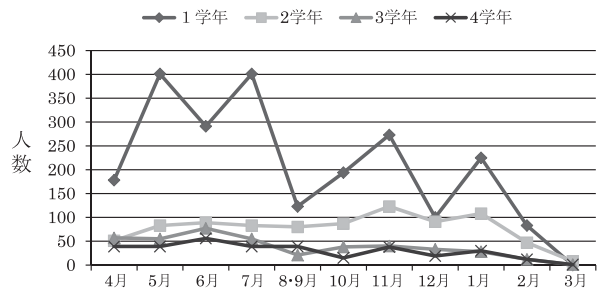


図1 学年別利用者データ (2010年度)

年間利用者は平均約4800人の利用者数であるが、図1でわかるとおり英語が1年次の必修科目となっているため利用者の7～8割以上が1年次となっている。

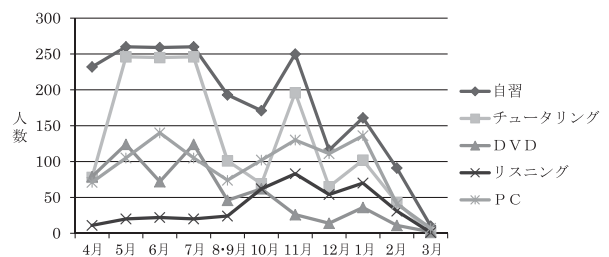


図2 目的別利用データ (2010年度)

2010年度の目的別データ（図2参照）からもわかるように、学生の自主学習である「自習」の数値が高く、「チュータリング」に対しては課題提出締切り日や試験の集中する時期に利用者数が多いのが特徴である。

3. 国際チューター育成プログラム認定書 (International Tutor Training Program Certificate-以下ITTPCと呼ぶ)

LLCは2001年に設立後、ITTPCに申請し1年後（2002年）に認定された。その後1年更新、3年更新、そして今回2度目の5年更新（2011年6月）が認可更新された。

3.1 College Reading and Learning Association (以下CRLAと呼ぶ)

CRLAは1960年代に成人学習者あるいは大学生を対象とした読解、学習支援、リメディアル教育、個人指導（チュータリング）やメンターによるモニタリングの分

野で学生間の専門活動研究学会としていくつかの教育機関によって設立された。その後学生チューター育成プログラムの開発を進め、それを標準化し証明書を発行する認定制度を設けた学会である⁸⁾。

3.2. ITTPC

ITTPC は、CRLA がチューターの有意義な業績を承認し強化することとチュータートレーニングの国際的基準化を図りそれに基づいて証明書を発行する権限を授与するための2つの目的を持っている。また、CLADEA (Council of Learning Assistance and Developmental Education Association), NADE (National Association for Developmental Education), Commission XVI of the American College Personnel Association の3大学会をはじめとし、その他3つの学会の承認によって認定許可が保障されている。チューター証明書には、レギュラーチューター (Certified tutor), アドバンスチューター (Advanced tutor), そして最高レベルのマスターツューター (Master tutor) の3つがある⁹⁾。2011年10月現在、ITTPC に認定されている教育機関はアメリカに約830校あり、続いてカナダに16校、オーストラリア、ギリシャ、韓国、ニカラグアそして日本がそれぞれ1校となっている¹⁰⁾。

3.3 国際チューター育成プログラム達成書

チューターは国際チューター育成プログラム終了証明書を得るために、申請時に ITTPC によって認可された項目を全て達成しなければならない。下記の12項目がそれにあたる。

1. 成績証明書のコピーの提出
2. チュータリングする科目が「優」以上である。
3. 監督者との面接
4. 先輩トレーナーに実際のチュータリングを視察してもらう (3回)
5. 既定のチュータートレーニングを終了する。
6. 最低1つのプロジェクトを完成させ発表する。
7. 1学期間に最低25時間以上のチュータリング経験がある。
8. チュータリングを利用した学生にアンケートを実施する (最低2部)
9. 自己評価表の提出 (3回分)
10. チューターリーダーの推薦署名
11. マネジャーの推薦署名
12. センター長の推薦署名

それぞれのチューターは、学期末を目標に全てを完成させるよう期待されるが、なんらかの事情によって期間が伸びる場合もある。

4. チューターの LLC 業務および活動についての意識調査

LLC の業務は、チューター達が ITTPC で認可されたトレーニングで実際に身につけた技術や知識を実践し体験する機会である。彼ら自身がこれらの経験をどのように感じ意識しているか知ることで、ITTPC のチューター育成効果がなんらかの形で観測されたと考え、2011 (平成23) 年度前期チューター7名に質問紙によるアンケートを実施した。

4.1 調査対象者

2011年度前期チューター7名 (詳細は表1参照) で、レベルは ITTPC のチュータートレーニング終了証書取得レベルを表している。

表1 調査対象者

学 年	レ ベ ル	稼働学期数	国 籍
院1	アドバンス	2	外 国
大学2	アドバンス	2	日 本
院1	レギュラー	1	外 国
交換留学	レギュラー	1	外 国
院1	レギュラー	1	外 国
院2	レギュラー	1	外 国
交換留学	レギュラー	1	外 国

4.2 データ収集方法

学期末 (7月) に各チューターへの教育効果意識を調査するため独自で作成した調査表を用いてアンケートを実施した。アンケート実施後、監督者 (筆者) とのインタビューを行い、その際にコメントとして付け加わったものも含んでいる。調査表調査表は1から5までの質問にコメント回答式をとったが、ここでは個人の達成度の質問である質問1を除く質問2からその他のコメントまでの回答結果によって、チューターの教育効果の可能性を検証した。

4.3 結果

結果は以下の表に整理した。

質問2の回答としては、チューターは授業の合間にシフトで LLC に勤務しているためか7つのコメントのうち4つは時間調整が難しかったと回答している。質問3については、チューターリングを通しての達成感 (7人中3人) やチームとして協働できたこと (2人) を有意義であったと答えており、質問4は教授法、コミュニケーションスキルの向上、そして協働力向上に関して積極的なコメントが得られた。チャレンジへの質問である質問2を除く20個のコメントのうち12個は、チューター技術

表2 チューター調査紙回答コメント

チューター	質問2. LLCで働く上で、一番のチャレンジは何でしたか？
A	最初のころはチームで一致するのはとても難しかった。
B	今回はタイムスケジュールがきつかったです。ご飯を食べる時間がなかった。
C	タイムスケジュールが一番難しかったです。授業自体の突然の時間割り変更が多かったため、時間調整は難しくなった。
D	私の日本語のレベルのせいで、日本人の学生にうまく説明できないときがあった。もしもっと日本語を知っていたら、たくさん学生を支援することができたと思う。
E	LLCでは、チュータリング、担当業務そしてプロジェクトをこなさなければなりません。全部を同時にするのは、私にとってかなり難しかった。
F	限られた時間内に多くの事務作業が多い。
G	LLC内を模様替えるのはとても難しかった。家具が多すぎて思ったような理想の空間づくりができなかった。

チューター	質問3. LLCでの貴重な経験は何でしたか？
A	メンバーが一致できるように働けたこと。
B	チュータリングの後、チューティー（利用学生）が「とても役立つチュータリングをありがとうございました」と言ってくれたとき、とっても嬉しかった。
C	一番貴重な経験は、トレーニングミーティングでした。毎週金曜日のトレーニングの中で発表技術やディスカッションスキル、そしてもちろんチュータリングスキルなど本当に役立ちました。
D	毎週決まった3人のチューティー（利用者）が英会話の練習に定期的に来てくれて、彼女たちのコミュニケーション向上に役立っているという充実感があった。同時に自分自身のスキルも向上したと思う。特に日本語についてはそう感じる。
E	チュータリングがとても貴重な経験でした。チュータリングの仕方やいろんな状況に対するコミュニケーションを学ぶことができた。
F	学生サポートとチームの一員として働けたこと。
G	たくさんの貴重な経験をしましたが、特に開催したワークショップの中で短期間であっても学生の学力だけでなく、英語に対する態度も向上したことはとても意義深い経験でした。同時に私の日本語も向上しました。

チューター	質問4. LLCの仕事は、あなたの人生に役立つ経験になったと思いますか？
A	チューターが進化するのを目の当たりにできたことはとても意味がある経験だと感じています。
B	役立つと思います。LLCに限らず、働いた経験は役に立つと思いますが、LLCはその中でもまた特別だと思います。留学生と文化を共有しながら、一緒に仕事できる機会はないし、日本人よりコミュニケーションをとるのが難しく、そのコミュニケーションの面では、すごく勉強になる。
C	LLCの仕事は人生の中でとても意味のある経験になったと思います。多くの事柄を学ぶだけでなく、外国人の友人も含めて多くの友人もできたし、特に一緒に働くチューターたちとは親しい友になれました。彼らはたくさん私に教えてくれました。一緒に働けたことを本当に感謝しています。
D	かなり役立ちます。LLCで働くことは、個人の成長だけでなく、他者の成長も促す忘れられない経験になりました。
E	とても役立つと思います。私は将来日本語教師になりたいので、LLCでの経験はそのためにたくさん役立つ経験だと思います。
F	コミュニケーションとマネージメントを学ぶのに最適な経験だったと思います。いろんな人との出会いはコミュニケーションスキル向上にとっても役立ちました。
G	もちろんです。私は言語にとっても興味がありますし、英語教師になりたいので、この経験は計り知れないほど貴重な経験となりました。また、チームの中でいつも家族の一員だと感じられたのでとてもよかったです。

チューター 5. その他コメント	
A	勤務時間外の仕事（プレゼンテーションの準備等）は、個人のスケジュールに影響する可能性が高い。
B	トレーニングミーティングはチュータリングやティーチングスキル向上にとっても役立った。
C	LLC を学内で一番有名な施設にしたいです！
D	とっても（働けて）嬉しいです。トレーニングミーティングは、互いの才能を発見したり、分かち合ったりするとても良い機会だったと思います。
E	次学期はもっとよくできたらいいと思います。
F	今のままでもよいですが、改善の余地があると思います。たとえば、出面表の記入の仕方やペーパーワークの削減です。
G	コメントなし

*英文は筆者が日本語訳にして掲載

向上と実際にそれを応用して得られた経験に対する積極的なコメントとなっている。

5. チュータリング利用者における意識調査

LLC でのチュータリング利用課題に協力した142名（学部1年次4クラス）を対象にチュータリングに対する意識調査を行った。

5.1 調査対象者

本学1年次142名（Basic English-4クラス・English・Communication-1クラス）である。

5.2 データ収集方法

LLC を利用する英語の課題を出題された1年次142名（5クラス）を対象に学期末（7月）にチュータリングに対するアンケート調査を実施した。

5.3 結果

142名中112名がチュータリングを利用したことがあると答えた。LLC 活用課題を出題したので、学生は LLC を定期的に利用し、利用目的もチュータリングが多くなっている（図3-1と3-2参照）。

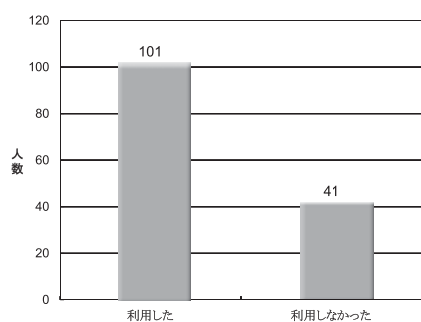


図3-1 LLCを定期的に利用しますか

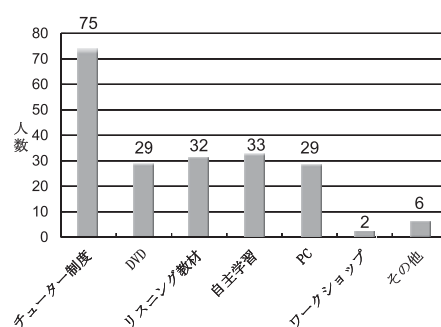


図3-2 実際に利用したことのあるサービス

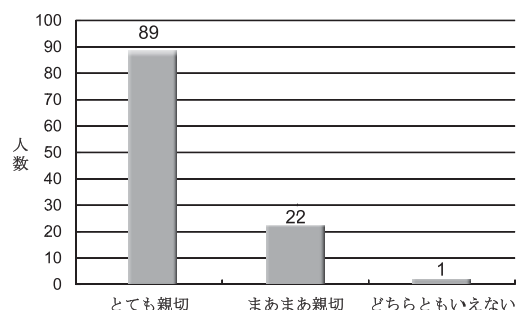


図4 チューターの対応について

「チューターの対応は親切でしたか」という質問に対して90%以上の学生が「親切」と回答した。

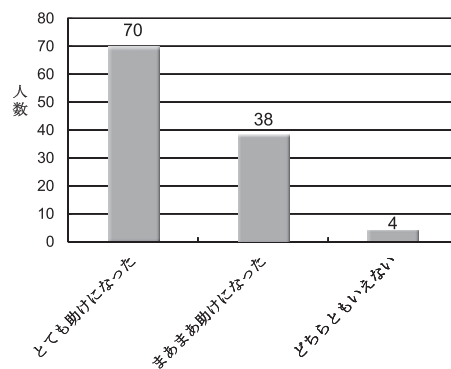


図5 チュータリングを通しての学力向上意識

「チュータリングは学力向上の手助けになったと思いますか」の質問でも、図5で示されているように利用者の90%が「助けになった」あるいは「まあまあ助けになった」と積極的な回答をしている。

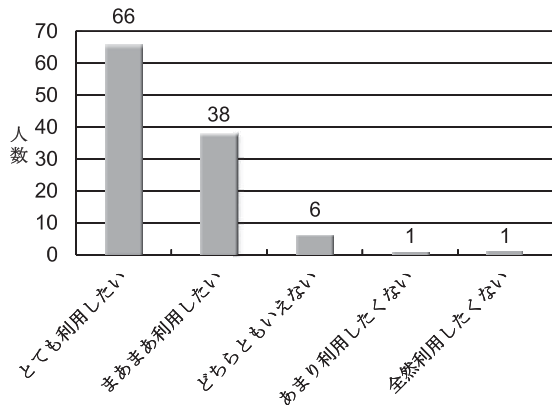


図6 将来のチュータリング利用について

図6は「今後もチュータリングを利用したいですか」という質問の回答結果である。ここでも約90%の利用者が「とても」あるいは「まあまあ利用したい」と答えた。全体的に利用者はチューターやチュータリングに対して積極的な回答をしているのがわかる。

6. まとめと考察

LLCは学生の自主学習促進と学習支援者チューターの技術向上のために設けられた施設であるが、アンケートの結果からチューター自身がCRLA認定のITTPCを基盤にしたトレーニングを受けることで、LLCでの経験はコミュニケーション能力や学習者をよりよく支援する技術を身につけるよい機会であると感じていることがわかった。また、チューターは実際に習得した技術をチュータリングなどで応用することでよりよい学習支援に対する意識を深め、その技術の習得の大切さに気がついているようでもある。

利用者に対しても、実際にチュータリングを経験した学生のほとんどは「学力の助けになっている」と感じ、「今後もチュータリングを利用したい」と答えている。このことからITTPC導入は、少なからず学習支援に積極的な効果をもたらしている可能性が高いと考えられる。

7. 今後の課題

ITTPC導入によって、学生間の学びの効果が現れていることは観測されたが、実際の数値的なデータが検証できていないため、その効果がどのくらい効果的か明確にされていない。今後それらを明確にするために、チュー

ター自身の技術の習得（コミュニケーション能力や教授法など）を数値的に測定できる方法で観測する必要がある。また利用者に対しても、チュータリングによって実際の学力にどのくらい影響を与えるのか明示できる研究が求められる。これらの数値的データを収集し検証できれば、ITTPC導入による学習支援効果が明らかになり、今後の学習支援にさらに大きく貢献するものになることが期待される。

謝辞

本研究にあたり、アンケート調査および授業連携課題にご協力いただいた白久正子講師（非常勤）、ならびに武村明子講師（非常勤）に心から感謝申し上げます。また、2011年度前期のLLCチューター7名にもお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 清水明男, 谷口多恵子: 羽衣国際大学 事務局発学習支援の実践, リメディアル教育研究, 2008, 第3巻第2号, p.1.
- 2) 小川洋: 大学における学習支援組織とその活動, リメディアル教育研究, 2008, 第3巻第1号, p.3.
- 3) 佐藤逸子, 国府田秀行: 聖学院大学ラーニングセンターにおける学習支援, リメディアル教育研究, 2008, 第3巻第2号, p.8.
- 4) 白藤純嗣: 福井大学学習支援センターの紹介, リメディアル教育研究, 2008, 第3巻第2号, p.12.
- 5) 亀崎澄夫: 学習センター広島修道大学の事例, リメディアル教育研究, 2008, 第3巻第2号, p.16.
- 6) 田中佳子, 田中隆治, 有賀幸則: 学習力と人間力を育てる学修支援システム, リメディアル教育研究, 2008, 第3巻第2号, p.23, 27.
- 7) 岡村直利, 豊木博泰, 宮原大樹: 山梨大学工学部供創学習支援室の利用状況と傾向, リメディアル教育学会第7回大会発表予稿集, 2011, p.174.
- 8) College Reading and Learning Association: About CRLA, <http://www.crla.net/about/index.htm> (accessed on Oct. 31, 2011).
- 9) College Reading and Learning Association: About ITTPC, http://www.crla.net/ittpc/about_ittpc.htm (accessed on Oct. 31, 2011).
- 10) College Reading and Learning Association: Current Certified Tutor Training Program, http://www.crla.net/ittpc/current_certifications.htm (accessed on Oct. 31, 2011).